

## &lt;全体分析&gt;

試験時間 60 分

## 解答形式

計算・論述・記述・選択

## 分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

## 出題の特徴や昨年との変更点

大問の中で分野の異なる内容からの出題が見られた。

## その他トピックス

教科書に記載のない内容が出題された。

空欄補充の形式での出題量が減少した。

## &lt;大問分析&gt;

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	計算 論述	地形	地学	地形というテーマに関して、さまざまな観点からの出題であり、この形式の出題は珍しい。問3の水星の断崖地形の成因については、教科書に記載のない内容からの出題であり、惑星などに興味がない受験生にとっては辛い内容である。	標準
II	論述 計算	フェーン現象 地震	地学	問1と問2で異なる分野から出題された。問1の(2)と(3)は、雲が消えた高度が示されていないため、問題として成立していないと言える。受験生が、雲の消失高度を設定することまでを求めての出題であるとするならば、その旨を明記すべきである。	標準
III	記述 選択 論述 計算	太陽系	地学	問1～問3と問5は確実に得点しなければならない。問4は、質量光度関係について触れた後に、主系列星としての寿命と質量の関係について簡潔にまとめる解答が望ましい。問6は、式を示す形の計算問題であるが、途中の式が何を表しているか文章で示すように。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## &lt;学習対策&gt;

神戸大学の地学の特徴は、論述問題の比率の高さにある。加えて、計算問題も確実に出題される。教科書に載っている公式が出題された場合に備え、計算練習を繰り返して正確性を高めるようにしよう。また、途中式が何を示しているかを言葉で説明することにも心がけて欲しい。

もちろん空欄補充などの記述の形式の問題も大事である。記述形式の問題は、全問正解して得点の取りこぼしが発生しないようにすべきである。教科書などにしっかりと目を通しておこう。

何よりも、論述問題こそが得点差がつく問題である。問題を数多くこなし、素早く文章化ができることを目指そう。